10歳, 男子の上顎歯肉扁平上皮癌の1例

笠原 和恵・井上農夫男・Mohiuddin AHMED

小野 貢伸・藤原敏勝・飯塚 正*

A case of squamous cell carcinoma of the upper gingiva in a ten-year-old boy

Kazue KASAHARA・Nobuo INOUE・Mohiuddin AHMED

Mitsunobu ONO・Toshikatsu FUJIWARA・Tadashi IIZUKA*

Abstract: Carcinoma of the oral cavity arising in children is extremely rare. A case of squamous cell carcinoma of the maxillary gingiva in a 10-year-old boy is presented.

The patient visited our department on June 20, 1989 complaining of pain and swelling in the labiogingival region of the right upper jaw. Clinical examination revealed a whitish verrucous growth in the right upper labial gingiva and alveolar mucosa. The growth extended from the central incisor to the deciduous first molar. Radiography showed slight alveolar bone resorption in right upper lateral incisor and deciduous canine region. In scintigraphy, there was no abnormal uptake. TNM classification was T2N0M0. Biopsy revealed a well-differentiated squamous cell carcinoma of the gingiva. Marginal resection of the maxilla from the central incisor to the deciduous first molar was performed under general anesthesia. The patient is well without any signs of recurrence 3 years after operation.

Key words: squamous cell carcinoma (扁平上皮癌), maxillary gingiva (上顎歯肉), children's tumors (小児腫瘍)

緒 言

小児の顎・口腔領域における癌腫の報告は少なく, なかでも上顎歯肉部に発生した扁平上皮癌の報告例はきわめてまれである. 今回われわれは10歳, 男子の上顎歯肉部に発生した扁平上皮癌の1例を経験したので報告する.

症 例

患 者: 10歳 男子.

初 診: 平成元年6月■日.

主 訴: 右上顎前歯歯肉部の腫脹.

既往歴・家族歴: 特記事項なし.

現病歴: 平成元年3月初旬に, C2| 唇側歯肉部に腫脹を自覚したが放置していた. 5月初旬, 腫脹部が白色顆粒状を呈し, 接触痛を伴うようになったため歯科を受診し, 口内炎の診断で局所の洗浄処置を受けたが効果なく, その後病変がさらに増大してきたため, 紹介により当科を受診した.

現 症

全身所見: 発育, 栄養はともに中程度で特記事項はない.

口腔外所見: 顔色は良好, 顔貌は左右対称で, 皮膚の知覚異常はなく, また所属リンパ節に転移を疑わせる所見は認めなかった.

口腔内所見: D C21| 唇側歯肉, 歯槽粘膜部に表面が顆

北海道大学歯学部口腔外科学第二講座
(主任: 戸塚靖則教授)

* 北海道大学歯学部口腔病理学講座
(主任: 雨宮 璋教授)

Second Department of Oral and Maxillofacial Surgery, School of Dentistry, Hokkaido University (Chief: Prof. Yasunori Totsuka)

* Department of Oral Pathology, School of Dentistry, Hokkaido University (Chief: Prof. Akira Amemiya)

受付日: 平成5年2月12日

写真 1 初診時口腔内写真 (頬側面観)

写真 2 術前X線写真

粒状で、辺縁部がやや隆起した27×20 mm 大の腫瘤を認めた。腫瘤の辺縁部は帯赤色、肉芽様で、中央部は白色を呈していた(写真1)。さらに唇側と連続してCとDの口蓋側歯肉に顆粒状の組織が存在し、その周囲のDからEに及ぶ口蓋粘膜部に軽度の発赤とびまん性の腫脹を認めた。

X線所見: 咬合撮影でCとDの槽間中隔から上方の3歯胚に及ぶ歯槽骨にわずかな骨吸収像を認めた(写真2)。^{99m}Tc, ⁶⁷Ga シンチグラフィーでは局所および全身に異常集積はなく、胸部X線写真でも異常所見を認めなかった。

臨床診断: 上顎歯肉腫瘍の疑い。

処置および経過: 試験切除を行ったところ病理組織学的に扁平上皮癌と診断された。上顎歯肉癌, T2N0M0の臨床診断のもとに、平成元年7月■日、全麻下でE, 3の歯胚を含むDからEまでの上顎骨部分切除ならびに腫瘍切除術を行った。術後の経過は良好で、術後3年を経過した現在、腫瘍の再発は認められていない。

病理組織学的所見: 腫瘍組織は、粘膜上皮下より3歯胚歯冠部にかけて大小の胞巣を形成し、浸潤性に増殖していた(写真3)。腫瘍細胞は軽度の異型性を示し、少数ながら分裂像も認められたが、胞巣中央部では著しい角化傾向を示し、高分化型の扁平上皮癌と診断した(写真4)。

写真 3 病理組織像 (H-E 染色, ×24)

写真 4 病理組織像 (H-E 染色, ×62.5)

考 察

小児の顎・口腔領域原発の癌腫の報告はきわめて少ない。戸塚ら¹⁾は、国内外の小児口腔癌腫の21例について文献的考察を行い、小児の原発性口腔癌腫はいずれの年齢層にも発生しうるものであるが、他部位の小児悪性腫瘍が5歳以下の幼児に好発するのに比べ、5歳以上の年長児に好発する傾向がみられると報告している。また発生部位は、舌7例、下顎6例と両者で過半数を占めるが、その他、口唇、口腔底、上顎歯肉にも発生しており、口腔諸臓器のどの部位からでも発生しうる可能性がある」と述べている。上顎歯肉部の癌腫については、われわれが渉猟しえた限りでは、5例が報告されているにすぎず、組織型別では未分化癌2例、未分化扁平上皮癌1例、扁平上皮癌2例であった(表1)。

組織由来に関しては、戸塚ら¹⁾は、下顎に生じた6例中5例は顎骨中心性に生じた歯源性由来のものであり、成人の下顎癌が粘膜癌であるのに比べ、著しい相違がみられたと報告している。上顎歯肉については、前述の5例中4例は歯肉原発で、顎骨中心性に生じたものはBoenninghaus⁶⁾の1例のみであった。Boenninghausは、腫瘍発生部位が先天奇形の顎裂に相当する上顎歯槽突起部であることから、胎生期の突起融合部の残遺上皮に由来したものと考察している。本症例は、X線写真で歯

表 小児の上顎歯肉癌の報告例

報告者 (年次)	部 位	組織診断	初診時年齢	性	初発症状	治 療	予 後
作田, 他 (1973) ²⁾	上顎	未分化癌	3 か月	女	AC 唇側歯肉部の腫脹	化学療法 (中断)	観察中 (3 年)
上野 (1968) ³⁾	上顎歯肉	未分化癌	7 歳	男	不明	放射線	死 亡 (8 か月)
蔵重, 他 (1982) ⁴⁾	上顎	未分化扁平上皮癌	11 歳	男	頬部の腫脹	手術, 化学療法	観察中 (5 か月)
Dowd (1954) ⁵⁾	上顎歯肉	扁平上皮癌	10 歳	男	C 4 歯槽部の腫脹	手術	観察中 (6 か月)
Boenninghaus (1961) ⁶⁾	上顎	扁平上皮癌	5 歳	男	BCD 歯肉, 口蓋部の潰瘍	手術, 放射線療法	観察中 (2 年)

肉腫脹部に一致した C と 2 の槽間中隔から 3 歯胚歯冠部に及ぶ歯槽骨に骨吸収像を認め、臨床的には顎骨中心性に生じた可能性も否定しえなかったが、病理組織学的に腫瘍組織は粘膜上皮と一部連続して粘膜上皮より 3 歯胚歯冠部にかけて、浸潤性に増殖している所見が認められ、歯肉に原発した扁平上皮癌と考えられた。

治療法に関しては一定の見解はなく、様々な方法が用いられている。すなわち、表に示すように、上顎歯肉部に発生した癌腫 5 例において、手術単独のものは Dowd⁵⁾ の上顎骨部分切除術を行った 1 例のみで、他は、手術と放射線療法の併用、化学療法単独、放射線療法単独、手術と化学療法の併用であった。また予後については、2 年以上の経過観察を行ったものは 5 例中 2 例のみと短期間であるが、そのうち 4 例が生存中であった (表)。

小児の悪性腫瘍の治療においては、治療による局所および全身に対する影響は成人に比べて計り知れないものである。すなわち、放射線治療では照射部位の成長に対する影響のほか、長期生存後の放射線性発癌も憂慮される。また多くの制癌剤は正常組織に対して少なからず悪影響や副作用を有しており、その選択にあたっては成長に対する影響も十分に考慮されなければならない。手術も、顔貌の変形および機能障害を引き起こし、成長期には特に問題が多い。このように小児においては、成人に対する配慮に加え、治療による成長への影響を十分に考慮して治療法を選択する必要がある。本症例は、上顎歯肉原発の高分化型の扁平上皮癌であり、軽度の歯槽骨の吸収が認められたものの、局所浸潤傾向は少なく、また所属リンパ節や遠隔転移を認めなかったことから、手術

単独での治療を試みた。結果は術後 3 年を経過した現在、腫瘍の再発はみられず経過良好で、上顎骨部分切除後の顔貌の変形および機能障害も比較的少ない。

結 語

10 歳、男子の上顎歯肉に発生した扁平上皮癌の 1 例について報告し、上顎歯肉に発生した小児口腔癌腫について文献的考察を加えた。

本論文の要旨は、第 45 回日本口腔外科学会総会 (1991 年 5 月 17 日、京都) において発表した。

引 用 文 献

- 1) 戸塚靖則, 富田喜内, 他: 12 歳、男子の下顎に生じた顎骨中心性扁平上皮癌の 1 症例. 日口外誌 25: 1487-1500 1979.
- 2) 作田正義, 白砂兼光, 他: 興味ある経過をたどった小児腫瘍の 1 例 (抄). 日口外誌 19: 676-677 1973.
- 3) 上野 正: 口腔癌の治療に関する研究. 口病誌 36: 4-12 1968.
- 4) 蔵重潤児, 小門浩一, 他: 小児に発生した未分化扁平上皮癌の 1 症例 (抄). 口科誌 31: 555 1982.
- 5) Dowd, J.F.: A case of squamous cell carcinoma of the oral cavity in a ten year old boy. Plast Reconstr Surg 13: 109-115 1954.
- 6) Boenninghaus, H.G.: Oberkieferkarzinom bei einem Kleinkind. Z Laryngol Rhinol Otol 40: 860-863 1961.